岡山大学環境理工学部研究報告
第5巻，第1号，pp.121-144，2000年2月

小地域統計による鳥取市内の人口分布と人口構造
—1995年を中心に—

市南　文一*

Distribution and Age Structure of Population in Tottori City

Fumikazu ICHIMINAMI

(Received January 24 , 2000)

This study examined population data on the quarters or sub-areas in Tottori city in 1960 and 1995. First, the distributions of population data in both years were drawn, then the population changes and the rates were explained. While large increaces and high growth rates were scattered in the suburbs of the city, large depopulation and high decreace rates were clustered in the old core in the built-up areas and rural areas in the hilly and mountainous areas. Second, the rates of population under 15 years old and the rates of population over 65 years old were analyzed. Finally, the age structure of population was examined with 10 samples of the quarters or sub-areas in anticipation.

Key words : *Tottori city, Population, Distribution, Age structure, City planning*

1．はじめに

都市活動のドーナツ化、つまり、都市の中心部のいわゆる「空洞化」[1)]が、多くの都市で発生し、社会一般で問題視されている。しかし、従来、人口が農山漁村部から都市に流出し、都市の中心部が一定期間、繁栄し、その後都市の中心部の活力が相対的に停滞・衰退し、郊外が繁栄・成長している現状の多くの事例の出現は、都市計画関係の法令や、政策立案者の総体的な意志決定にもとづいて長年にわたり推進されてきた都市・地域政策の展開の必然的結果ではないのか。また、Philadelphia 大都市圏で人口密度などの人口指標を長期間にわたり同心円的に分析して潮汐波的な成長を指摘した Blumenfeld（1954）のような言説が、中・小都市の盛衰にまで単純に適用できると考えるならば、都市が成長してその中心部から郊外にかけてドーナツ化が発生することは特別驚くに値しないことである。日本では経済不況が長期・恒常化する中で、ほぼ硬直化した縦割り予算の縮・削減案が打ち出される中で、都市中心部の再開発の必要性までが声高く主張されたりしている。しかし、全体的には相変わらず複雑な都市の状況に大きな変化はなく、都市・地域づくりの基本的理念の骨格は、やはり見えにくい。

県庁・市庁のような行政機能が備わっている都市は、たいてい、古い歴史がある町であり、明治時代以前においても経済・交通の要衝であり、鳥取市もこのような歴史的基盤の上に発展してきた（市南、1991）。市南（1994）では、主に 20 世紀後半以降の人口分布の変容についてまとめたが、本稿は、その続編とも言うべきものである。鳥取市内の人口のドーナツ化の様子については、市南（1994）で 29 地区（ほぼ小学校区に対応する地区もあるが、全部がこれを満足するとは限らない。また、このうち、旧市域には 7 地区がある。）別に 1930 ～ 1990 年の期間について報告した。しかし、この論文は、鳥取市だけではなく、これを取り巻く鳥取県東部の町村についても検討し

* 岡山大学環境理工学部環境管理工学科

た関係で、鳥取市内の単位地区をあまり細かく設定することができなかった。その結果、人口分布のドーナツ化や人口減少がとりわけ顕著な中心部と山間部、および中心部と人口増加が著しい郊外との対照性などはある程度解明することができたが、町丁レベルでは分析しなかった。

そこで本稿では、鳥取市の人口に関する諸指標を検討する一環で、小地域統計を用いて人口分布とその時間的変化を明示する。人口指標は、多くの指標と関連し合っているので、本来、長期的・広域的・総合的に検討されるべき都市活動の動向を判断するには、基本的なものである。ここでは、1995（平成７）年国勢調査結果の小地域統計に関する鳥取市の町別・年齢３区分別・年齢（５歳階級）別の人口・世帯数の確定数値にもとづいて、図化作業をした結果をまとめ、実地調査を交えて若干の考察を試みた。なお、複数の年次の人口増減の詳細な解析についても、検討が当然、望まれるところであるが、古い年次の町丁別人口数値の未確認や紙数の制約などの理由から本稿ではごく一部の試験的な例示にとどめることとする。

２．町丁レベルの鳥取市の人口分布・増減とその推移

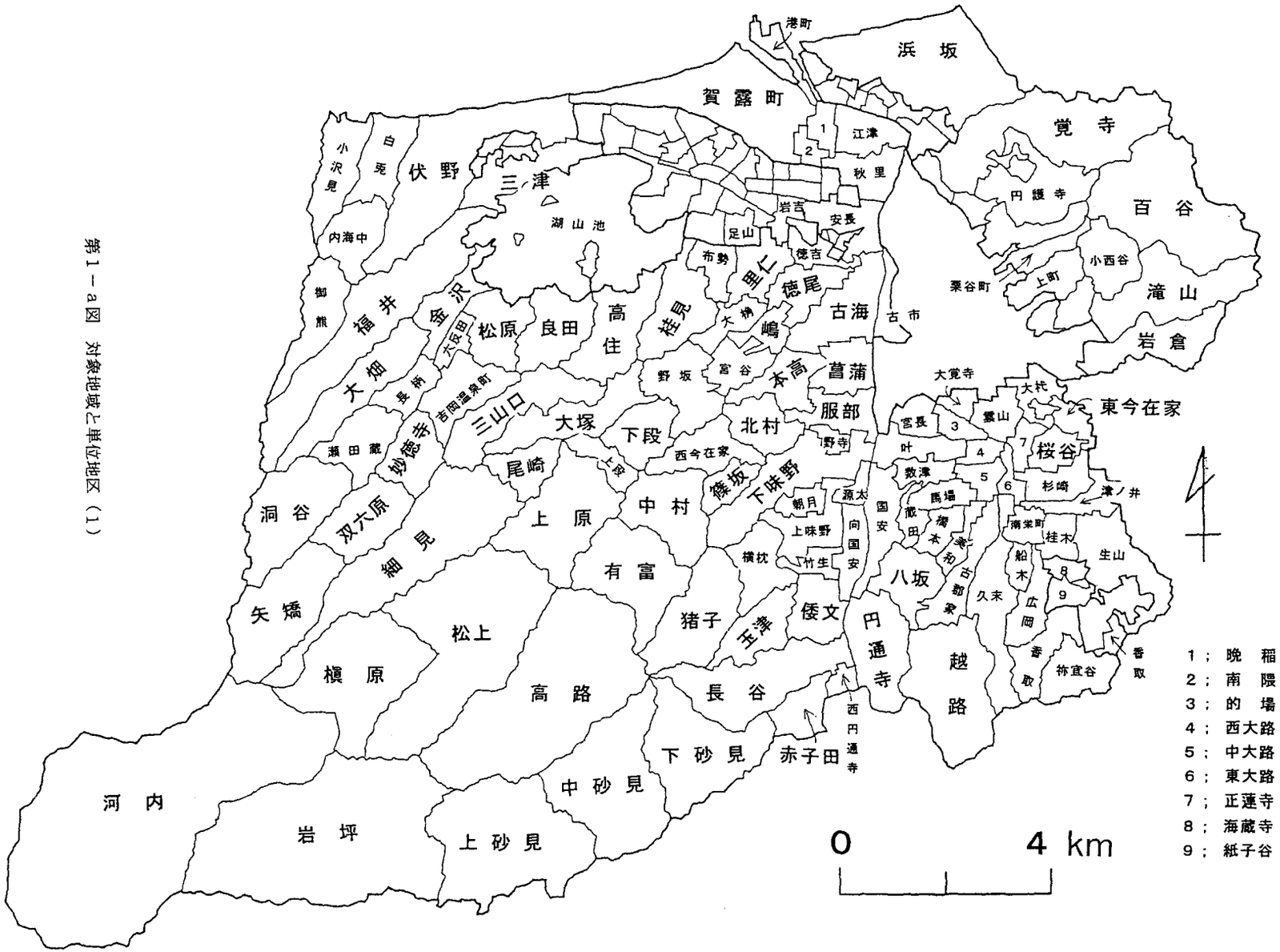
ここでは、町丁別の人口数、１世帯当たりの人口数、およびそれらの時間的推移に関する統計資料を整理・加工し、その結果を考察する。鳥取市の町丁（市役所では、「町」と表章している）数は、1995 年では 299 あるが、途中で変化・新規登場・消滅（境界変更や編入によるものを含む）があって非常に複雑であるので、長期間の正確な時系列分析は事実上不可能である。そこで、1995 年時点を中心にして、1960 年から 1995 年にかけての期間の変化に関する資料を提示して説明していくことにしたい。なお、町丁別の地図の存在を確認することができなかったので、この研究を開始するにあたり、市販されている都市地図や住宅地図などを参考にして、対象地域と単位地区である町丁を示した第１図（３枚から構成される）を、独自に作成した[2)]。

第２－ａ図と第２－ｂ図（旧市街とその近傍は、ａ図では白抜きになっているが、拡大してｂ図に掲載している。以下、第７図まで同様。）は、鳥取市内の人口分布（1960 年）を描出している。比較的簡便な表現法を解説している小笠原（1994）に従って、人口数とその増減の分布を描出した。一見して、多くの人口が旧来の市街地にかなり集中して分布していることが明瞭である。やや細かく観察すると、江戸時代以来の町人町の中心であった狭い町割が踏襲されている町丁（旧袋川の北・東に位置する二階町、川端、本町、茶町、元魚町、鍛冶町など）とともに、それらの周囲に位置する湯所、西品治、行徳３丁目、瓦町、今町、吉方温泉、立川町などの各町丁においても、かなりの人口集積がみられた。しかし、この頃、JR 鳥取駅の南部の地区には、工場や農地などが展開していたため、これらの地区の人口は山陰本線の北側よりかなり少ない。このほか、千代川の左岸に沿った古海、古来より港町・漁港として繁栄してきた賀露町[3)]、第二次世界大戦後の住宅地開発がすすんだ浜坂地区などの人口の多さが顕著である。以上の地区以外の地区でも、人口規模の若干の差異がみられるものの、旧市街地以外の地区の人口規模の差異はさほど目立たず、農村部の地区では過疎化がすすんでおらず、人口は均等に比較的近い分布パターンをみせていた。

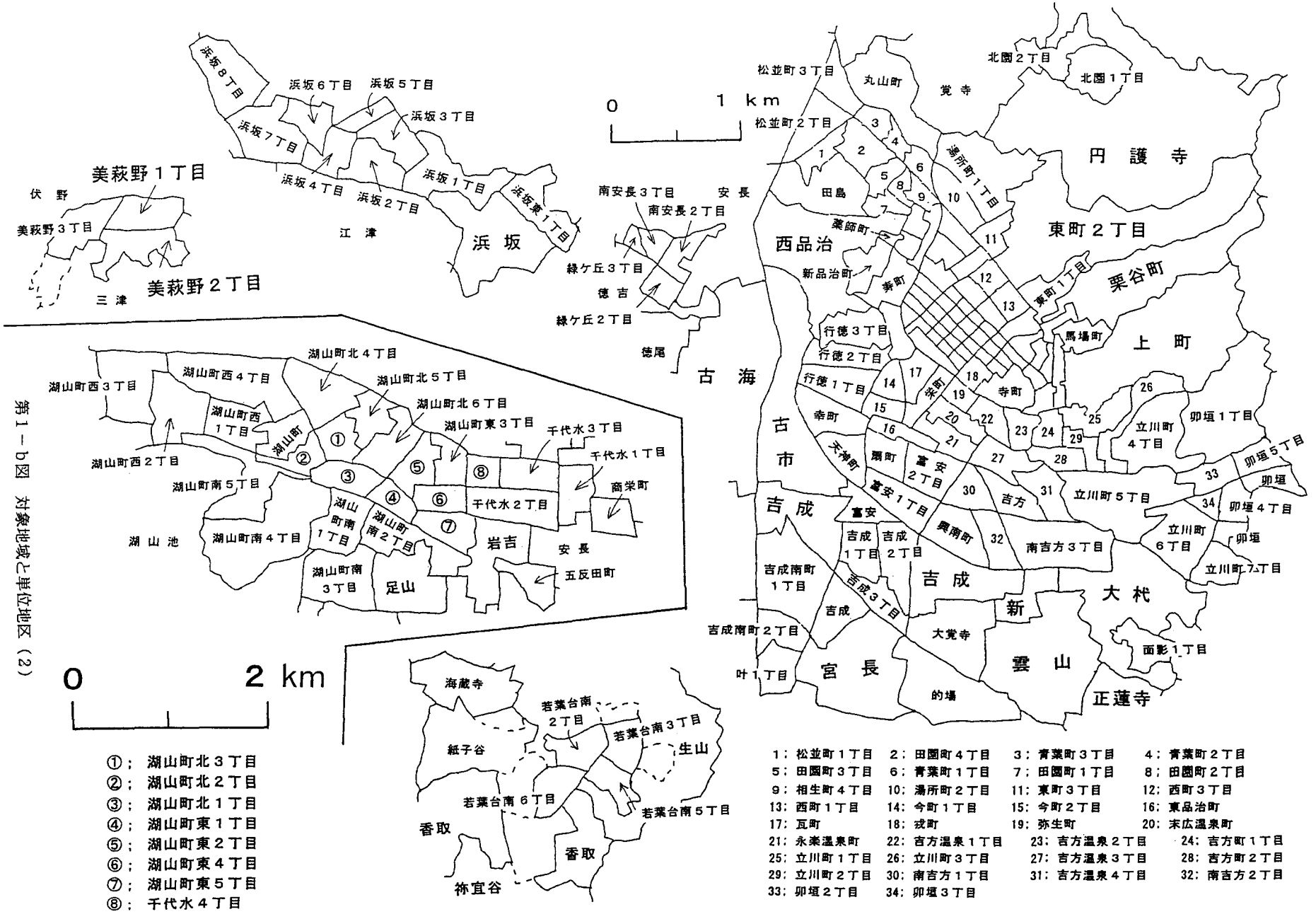
第３－ａ図と第３－ｂ図は、鳥取市内の人口分布（1995 年）（最大＝ 5,038 人、最小＝ 10、平均＝ 516.011、標準偏差＝ 599.728）を描いている。第２－ａ図や第２－ｂ図と比較すると、旧市街地の中心部の地区の人口規模を表す円の重複が少なくなり、それらの多くの地区人口が減少したことが明白である。これとは対照的に、JR 鳥取駅の南側に位置する吉成、大覚寺、雲山、大杙、宮長、桜谷、東今在家などの地区や、東郊の滝山、岩倉、北郊の北園、西郊の徳吉、徳尾から湖山北、湖山南、湖山西、美萩野の各町丁などでは、かなり顕著な人口増加がみられた。さらに、山間部の多くの地区で人口が減少したことが明らかである。

上述の事柄を確認するために、第２－ａ図と第３－ａ図、および第２－ｂ図と第３－ｂ図の人口規模の差をそれぞれ、求めて図化した。第４－ａ図と第４－ｂ図は、人口増減（1960 ～ 1995 年）を描いている。これらの図の説明は、前述の内容と重複するところが多く、旧来の市街地の地区のほとんどで人口減少がみられ、これらの周囲の郊外地区の人口が大幅に増加し、いわゆる人口分布のドーナツ化が顕在化した。また、市の南西部、南部、西部などの山間部のほとんどの地区人口が減少したことも、明瞭に示されている。

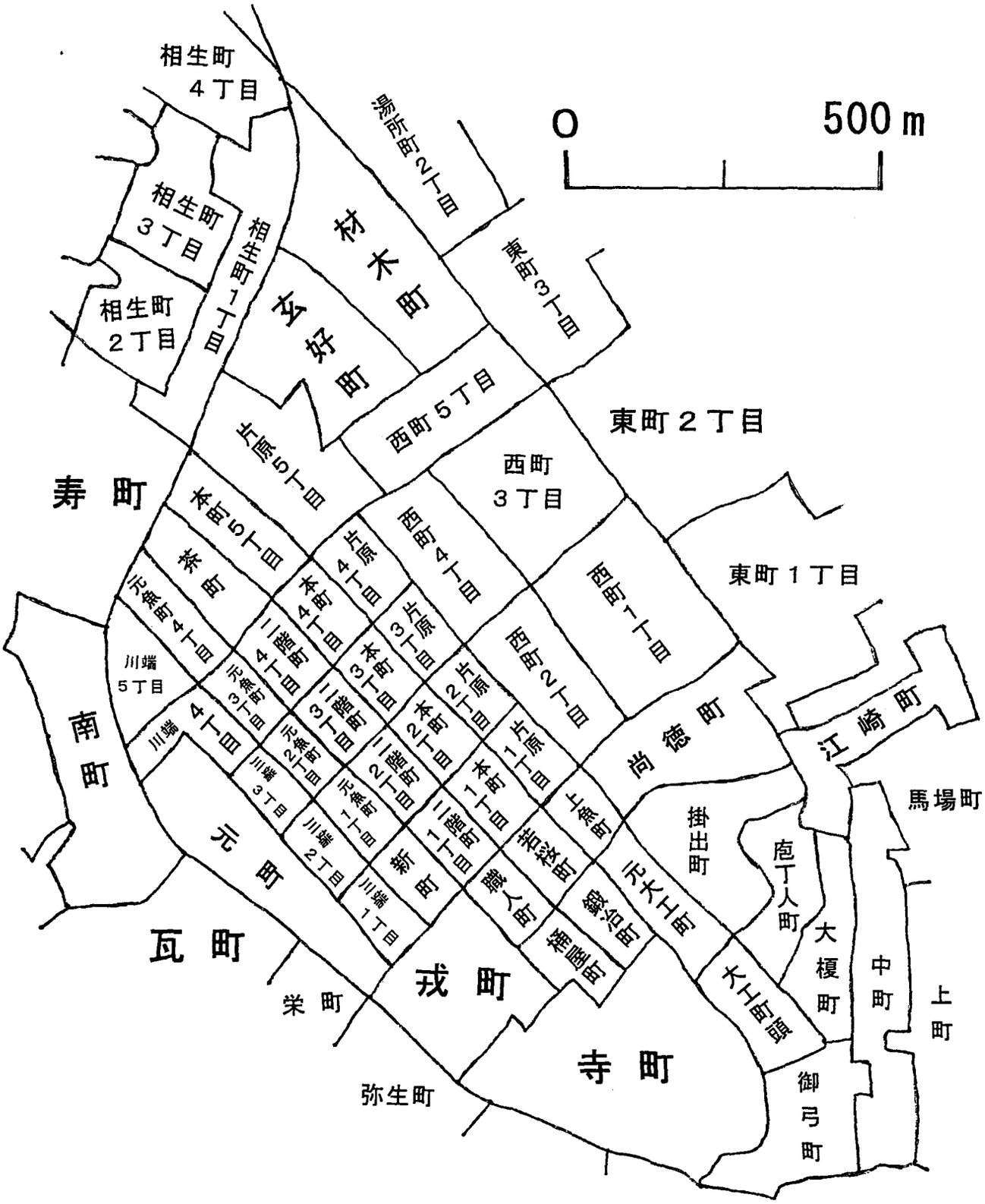
人口規模の増減数に加えて、相対的な人口変化を検討するため、比率を算出して地図化してみた。第５－ａ図と第５－ｂ図は、人口増減率（1960 ～ 1995 年）の分布（最大＝ 1,608 %、最小＝-85.5、平均＝ 44.738、標準偏差＝ 232.108）を示している。ここでは、1960 年から 1995 年までの人口増減率を町丁別に検討する。単位地区の個数と数値の散



第1－a図　対象地域と単位地区（1）



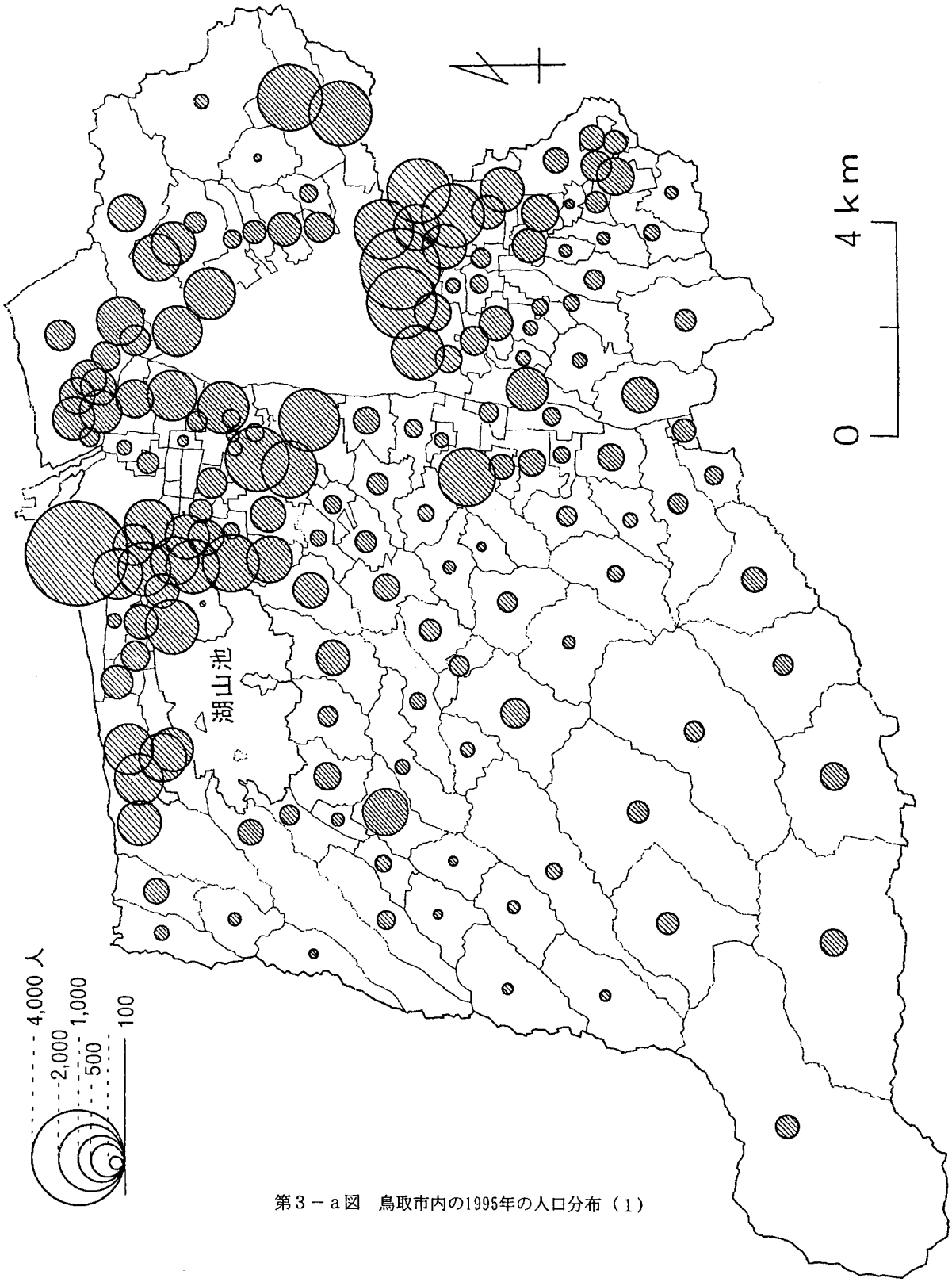
第１－ｂ図　対象地域と単位地区（２）



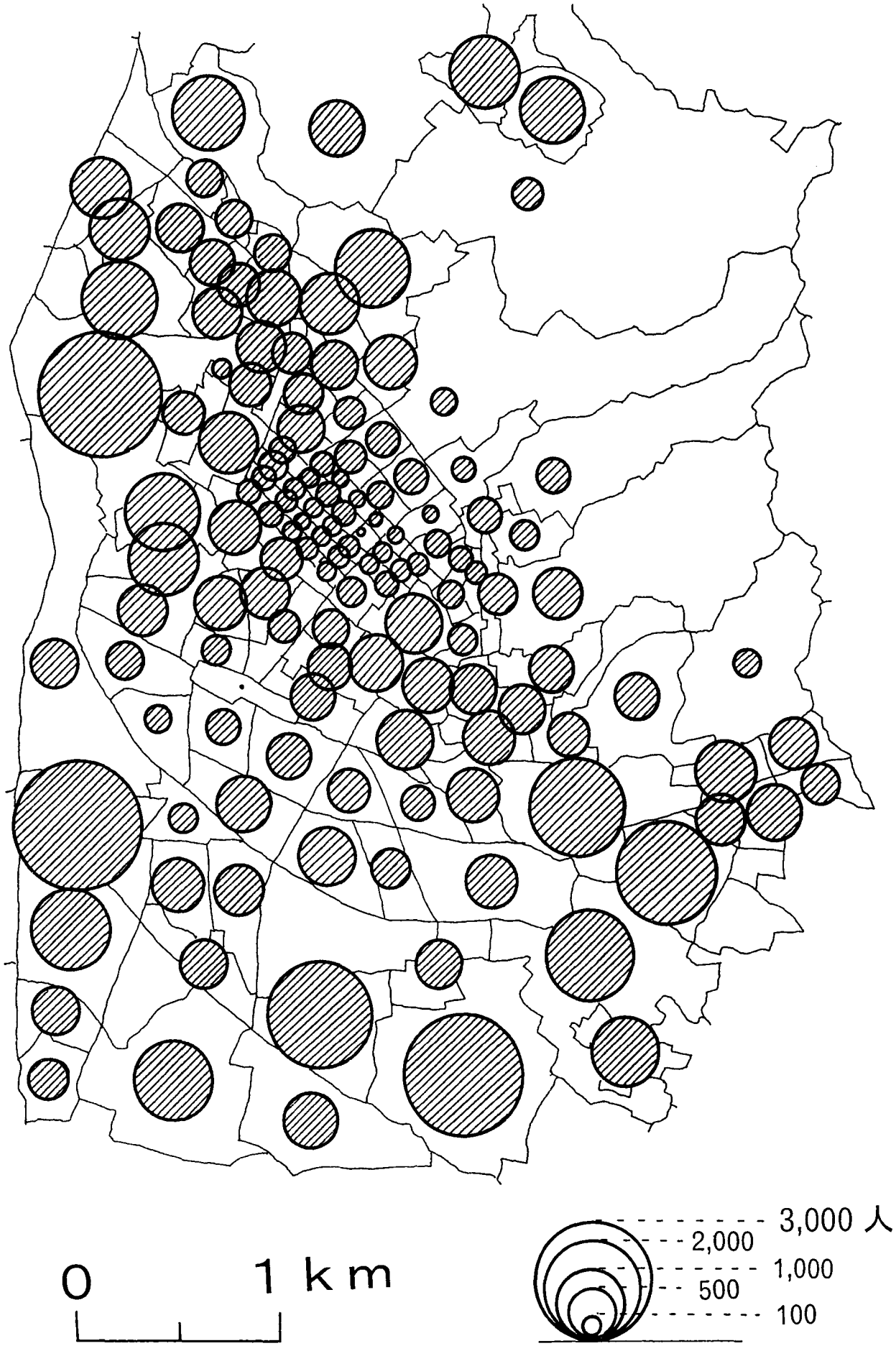
第１－ｃ図　対象地域と単位地区（３）

第２－ａ図　鳥取市内の1960年の人口分布（１）

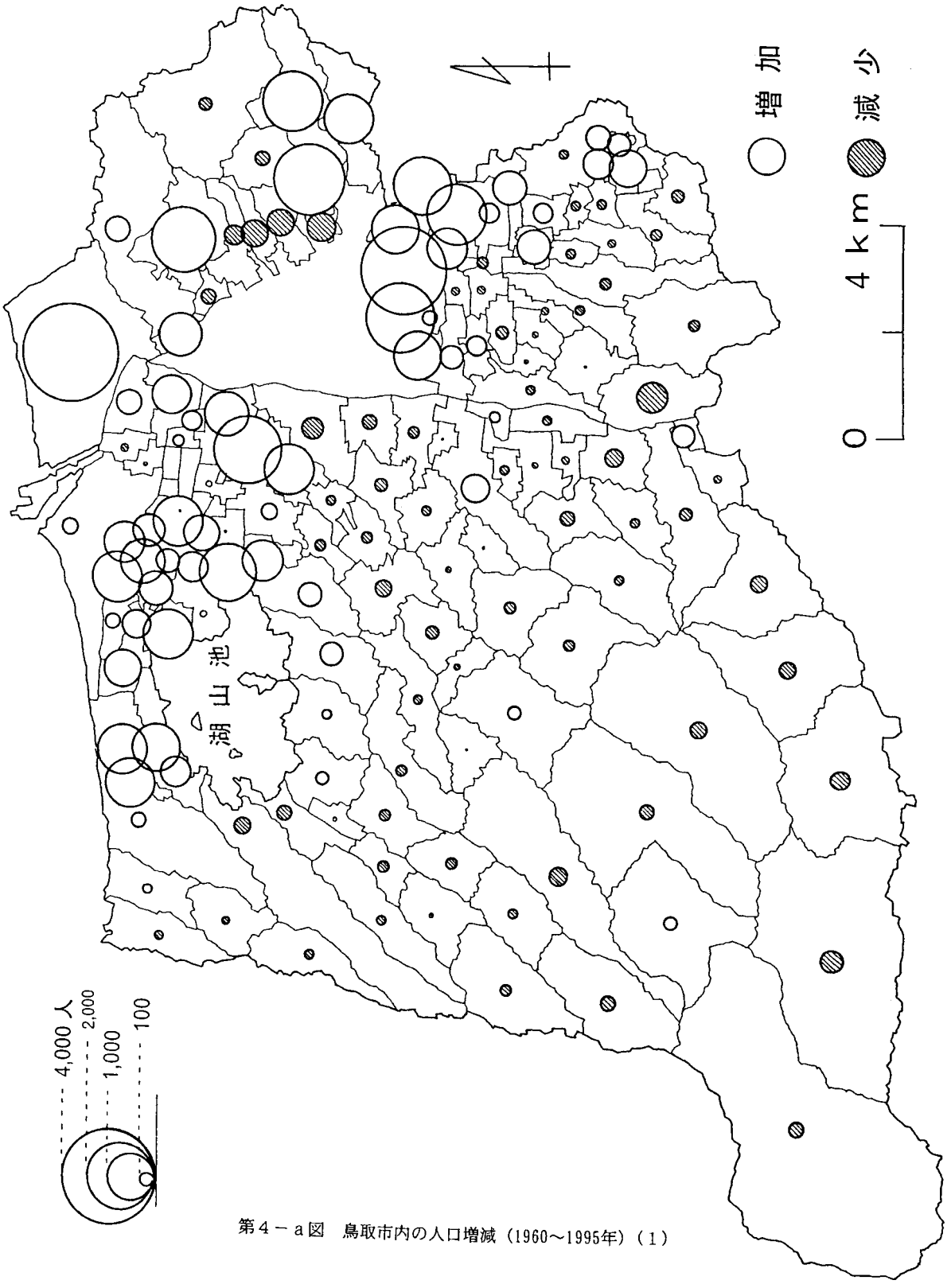
第２－ｂ図　鳥取市内の1960年の人口分布（２）



第３－ａ図　鳥取市内の1995年の人口分布（１）



第３－ｂ図　鳥取市内の1995年の人口分布（２）



第4－a図　鳥取市内の人口増減（1960～1995年）（1）

第４－ｂ図　鳥取市内の人口増減（1960～1995年）（２）

布状態から判断して、人口増減率を８階級に区分して分布図を描出した。千％以上の比率を示す最高階級には、1960年の時点には町丁の名称がなかったところや、1995 年には細分されている町丁を合わせて 1960 年の旧地区の名称に空間的に対応させた場合も含まれている。この階級に該当する地区・地域には、かつての鳥取市街地の郊外に相当した部分で比較的古くから宅地化が進展し開発されてきた田園町・青葉町のような北ないし北西郊外、JR 鳥取駅の南郊外で以前は工場や水田であった扇町・天神町・興南町や吉方界隈、南郊の延長部分である大覚寺・桜谷・南栄町、さらには津ノ井ニュータウンの若葉台、そして西側に眼を転じると、いわゆる湖山地区一帯の多くの地区や徳吉、千代水付近、および美萩野などがあげられる。このうち、若葉台地区は「鳥取新都市」と呼ばれており、計画時から文教用地が準備され、鳥取環境大学の開学（2001 年度の予定）がようやく決定した。また、日本海新聞の記事などによると、つのいニュータウンの住宅地区である若葉台が 1400 区画を対象にした電線類の地中化、豊かで落ち着いた色彩の家並み・道路・植栽、CATV の導入を評価されて 1999 年度の都市景観大賞で、建設大臣賞の都市景観百選に選定された。住宅地内では歩車共存をはかったヴォンネルフ（woonerf）道路が多く取り入れられているなど、ゆとりと潤いが感じられる居住景観の形成が着実にすすめられており、今後の発展に明るい材料が揃ってきた。

500 ～ 1,000 ％の範囲の増加率を示す地区の多くは、南郊の吉成（よしなり）から雲山（くもやま）・東今在家（ひがしいまざいけ）にかけての一帯にみられ、現在でも、民間によるまとまった住宅地開発が進行している地域である。これらの地区は、最高階級の地区から連続して分布している。また、かなり最近の開発で人口が急増した北郊の北園・円護寺（えんごじ）なども、この範囲に入る。

200 ～ 500 ％の増加率を示す地区のいくつかは、500 ％以上の比率を示した地区群に連続して分布している。これらは、宮長（みやなが）、的場（まとば）、徳尾（とくのお）、布勢（ふせ）、湖山町西１～３丁目などである。この他、市街地の北部一帯の浜坂地区、市街地の東部の立川町一帯や滝山などがこの階級に所属する。

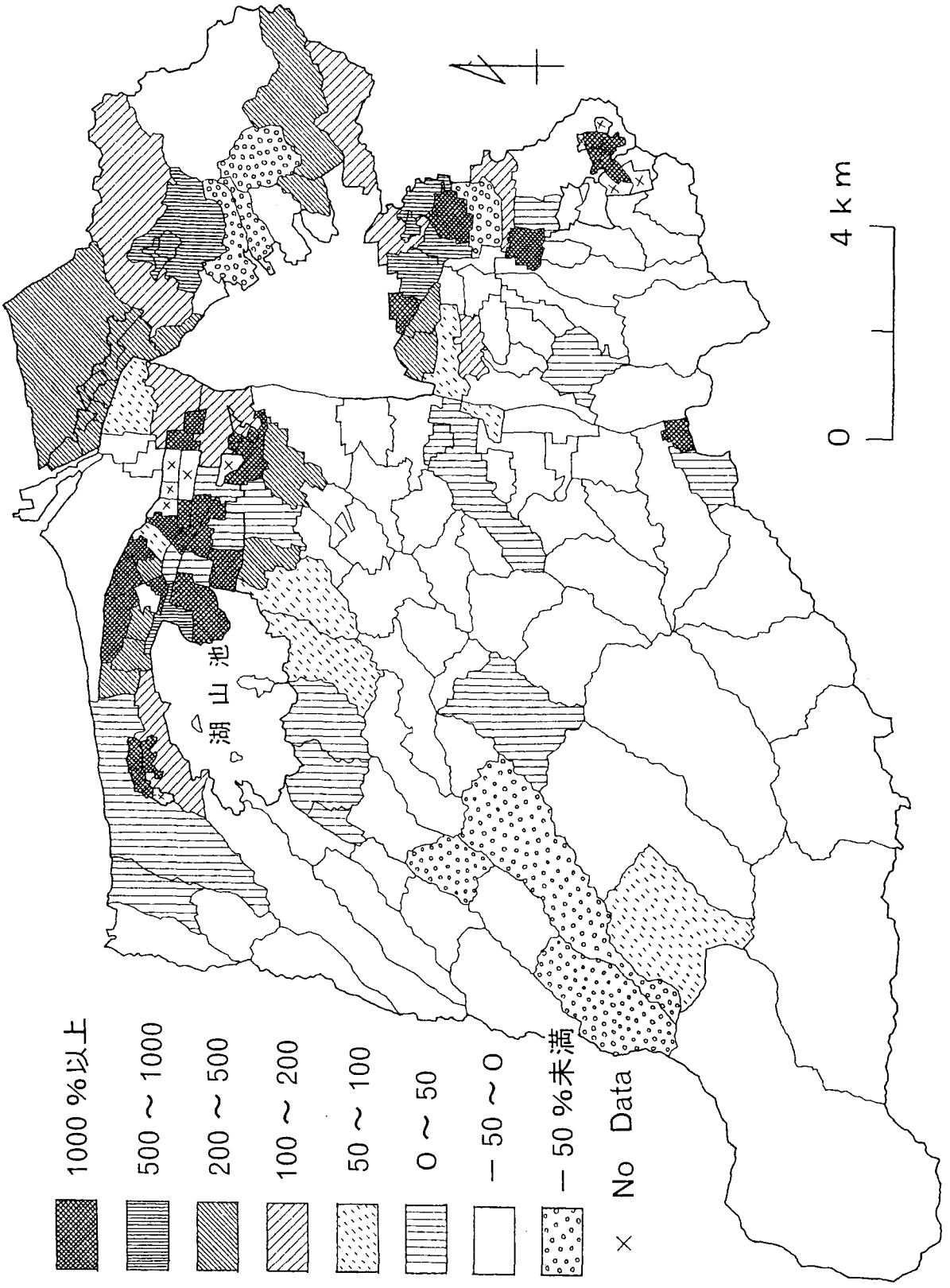
100 ～ 200 ％の増加率を示す地区には、覚寺（かくじ）、田島（たしま）、松並町、秋里、安長（やすなが）、大杙、岩倉、数津（すづ）、津ノ井（つのい）、三津（みつ）があり、これまでに登場した３つの階級の地区に比較的近接して分布していることが特徴的である。人口増加率の高さは他と比較するとさほど顕著ではないかも知れないが、以前の人口数の約２～３倍になっているので、長期的には大きく変化している地区である。

また、50 ～ 100 ％の増加率を示す地区では、市街地の北郊や南郊の延長である江津（えづ）や叶（かのう）など、湖山池の南岸の桂見（かつらみ）・高住（たかずみ）がある。０～ 50 ％の増加率を示す地区は、人口の急・激増地帯の間隙を埋めるように分布したり、その延長部に分布する。前者には、富安（とみやす）、古市（ふるいち）、西品治（にしほんじ）、里仁（さとに）、足山（あしやま）、岩吉（いわよし）などがあり、後者には、良田（よしだ）、松原（ふしの）、伏野（ふくと）、白兎などがある。

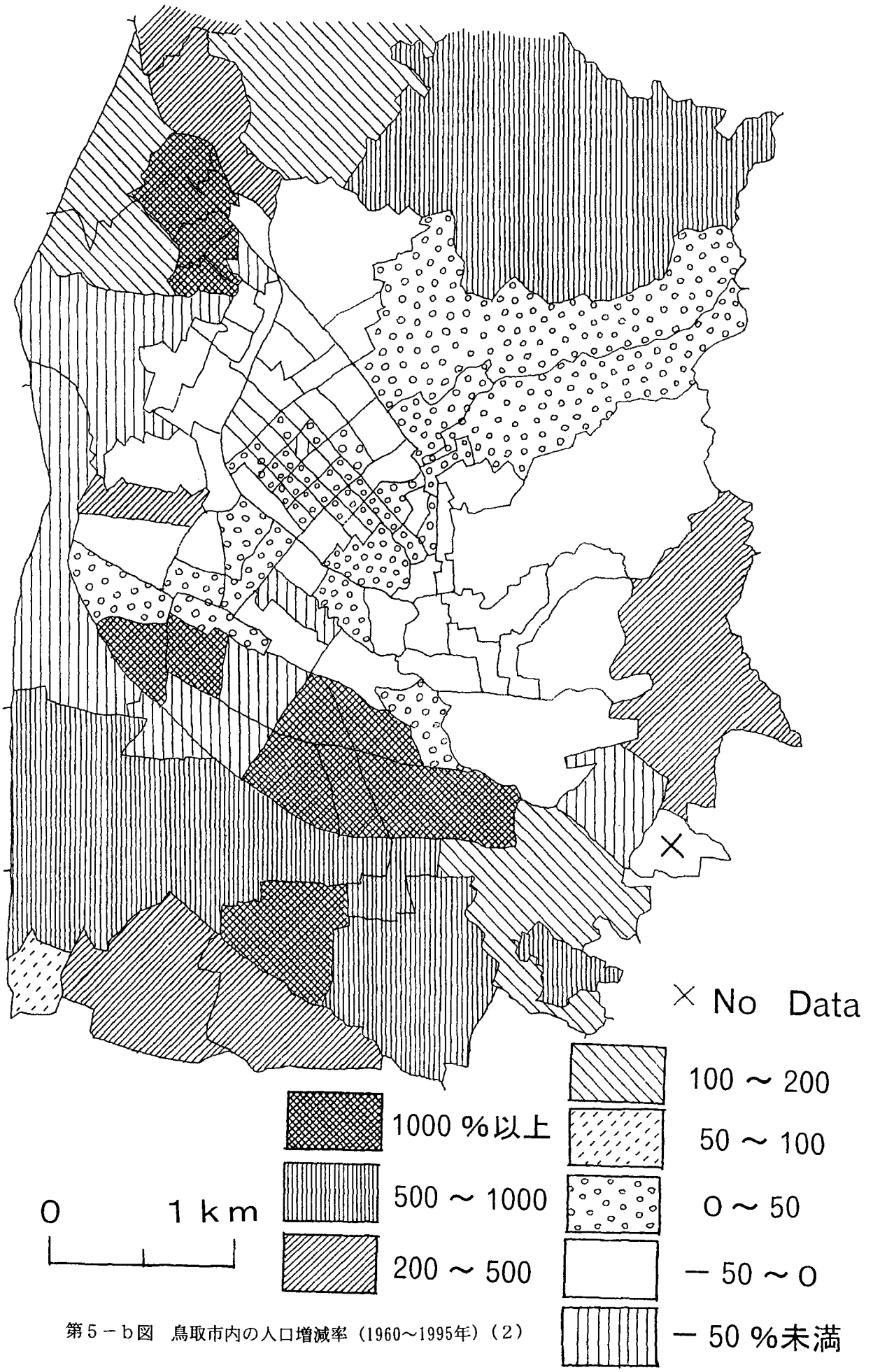
以下では、人口が減少した階級に属する地区の分布について述べる。人口が減少した階級は、以前の人口数の半減までか、それ以上の減少（最低の階級）の２つに区分されている。最低の階級に入る地区は、旧市街地の中心部やその隣接地域（小西谷（こざい））に圧倒的に多く分布するほか、鳥取市の西部の山間部（細見（ほそみ）、妙徳寺（みょうとくじ）、矢矯（やはぎ））にも分布する。東品治（ひがしほんじ）町（-98.0 ％）では、ＪＲ鳥取駅や付近の道路整備のために住宅地がほとんど消滅し、栄（さかえまち）町（-85.5 ％）、本町１丁目（-72.6 ％）、今町２丁目（-70.1 ％）、二階町３丁目（-59.6 ％）、職人町（-59.7 ％）、川端３丁目（-70.4 ％）、吉方温泉１丁目（-60.7 ％）などでは、事務所・商業・交通などの機能の拡大により、人口が激減して、人口分布のドーナツ化を示す核心部の一部を形成するようになっている。鳥取市の市街地中心部での自営業者からの聞き取り調査によると、モータリゼーションの到来以前では、中心部での職住一致ないし近接が一般的で、昔ながらの狭い営業・居住空間に慣れて暮らしてきたが、経済が発展して一般庶民の生活の物質的側面に若干のゆとりが生じると、自動車が商売や生活に不可欠になってきた。店舗に駐車用の空間がない場合、当初は近くの駐車場を借用しているだけで済んだが、家財道具類が従来より大型化するなど、生活様式も一般的に変化して２台以上の自動車を１家族（世帯）で使用したり、より広い居住空間が求められるようになってくると、職住分離を選択して郊外・市外に住宅を求めざるをえなくなり、その結果、中心部の業務地まで通勤するようになってきた。さらに、地価の相対的な高さなどに起因する居住空間の狭隘化や駐車場の狭さが、住民を都市の中心部から結果的に追い出してきたという考えも成り立つ。

なお、1960 ～ 1995 年の人口増減比率と、1995 年の人口との相関係数は 0.49 である。

３．町丁レベルの人口構造とその推移



第５－ａ図　鳥取市内の人口増減率（1960～1995年）（１）



第５－ｂ図　鳥取市内の人口増減率（1960～1995年）（２）

第１表　鳥取市の年齢３区分別の人口の推移

年　次	0 ～ 14 歳			15 ～ 64 歳			65 歳 以 上		
	人口数	指 数	比　率	人口数	指 数	比　率	人口数	指 数	比　率
1920 年	25,529 人	100	35.7 %	38,481 人	100	53.8 %	7,466 人	100	10.4 %
1925 年	26,989	106	36.3	39,926	104	53.7	7,247	97	9.7
1930 年	27,986	110	36.1	44,664	116	57.6	4,917	66	6.3
1935 年	29,217	114	36.3	46,235	120	57.5	4,966	67	6.2
1950 年	34,767	136	34.7	60,143	156	60.0	5,054	68	5.0
1955 年	36,063	141	33.5	65,060	169	60.5	6,397	86	5.9
1960 年	33,566	131	31.3	67,018	174	62.4	6,802	91	6.3
1965 年	29,377	115	27.0	71,671	186	65.8	7,812	105	7.2
1970 年	27,203	107	24.0	76,866	200	67.9	9,082	122	8.0
1975 年	28,968	113	23.7	82,364	214	67.3	10,955	147	9.0
1980 年	30,626	120	23.4	87,284	227	66.6	13,112	176	10.0
1985 年	31,205	122	22.8	90,794	236	66.2	15,054	202	11.0
1990 年	29,105	114	20.5	94,816	246	66.7	18,238	244	12.8
1995 年	26,645	104	18.2	97,434	253	66.6	22,157	297	15.2

鳥取市企画部企画室 編（1982）：「昭和 55 年国勢調査結果の概要」．他にもとづいて作成．

３．１　人口構造の空間的分布

町丁レベルの人口構造をみる前に、まず、鳥取市全体の人口構造の推移をみておく。鳥取市企画部企画室（1982）によると、鳥取市全体の人口の５歳別の年齢構造は、1950 年には明らかにピラミッド型であったが、年少人口数・比率が次第に減少・低下し、老齢人口数・比率が次第に増加・上昇したので、1970 年代以降には釣鐘型になっている（図は省略）。

次に、第１表により、1920 年以降の０～ 14 歳の人口比率や 65 歳以上の人口比率をみる。０～ 14 歳の人口比率は第２次世界大戦前の 35 ～ 36 ％台から一貫して減少し、1995 年には 18.2 ％になった。また、65 歳以上の人口比率の推移では、1920 年の 10.4 ％から 1950 年の 5.0 ％まで漸減していき、その後に漸増に転じて、1985 年以降には 1920 年当時の水準を超えて、1995 年には 15.2 ％になった。

鳥取市の０～ 14 歳の人口比率は約 70 年余りの期間に格段に（比率の数値では、約２分の１に）低下したが、全体の人口数がほぼ倍増しているので、０～ 14 歳の人口数は 1920 年代当時の数値と大きく変わらない。しかし、今回は取りあげないが、鳥取市の周囲の町村の０～ 14 歳の人口数・比率の減少・低下は、すでに社会的に大きな問題になっている。また、鳥取市の 15 ～ 64 歳や、65 歳以上の人口数は、長期的にみると社会増の影響が加わり、それぞれ、約 2.5 倍と約３倍になっている。

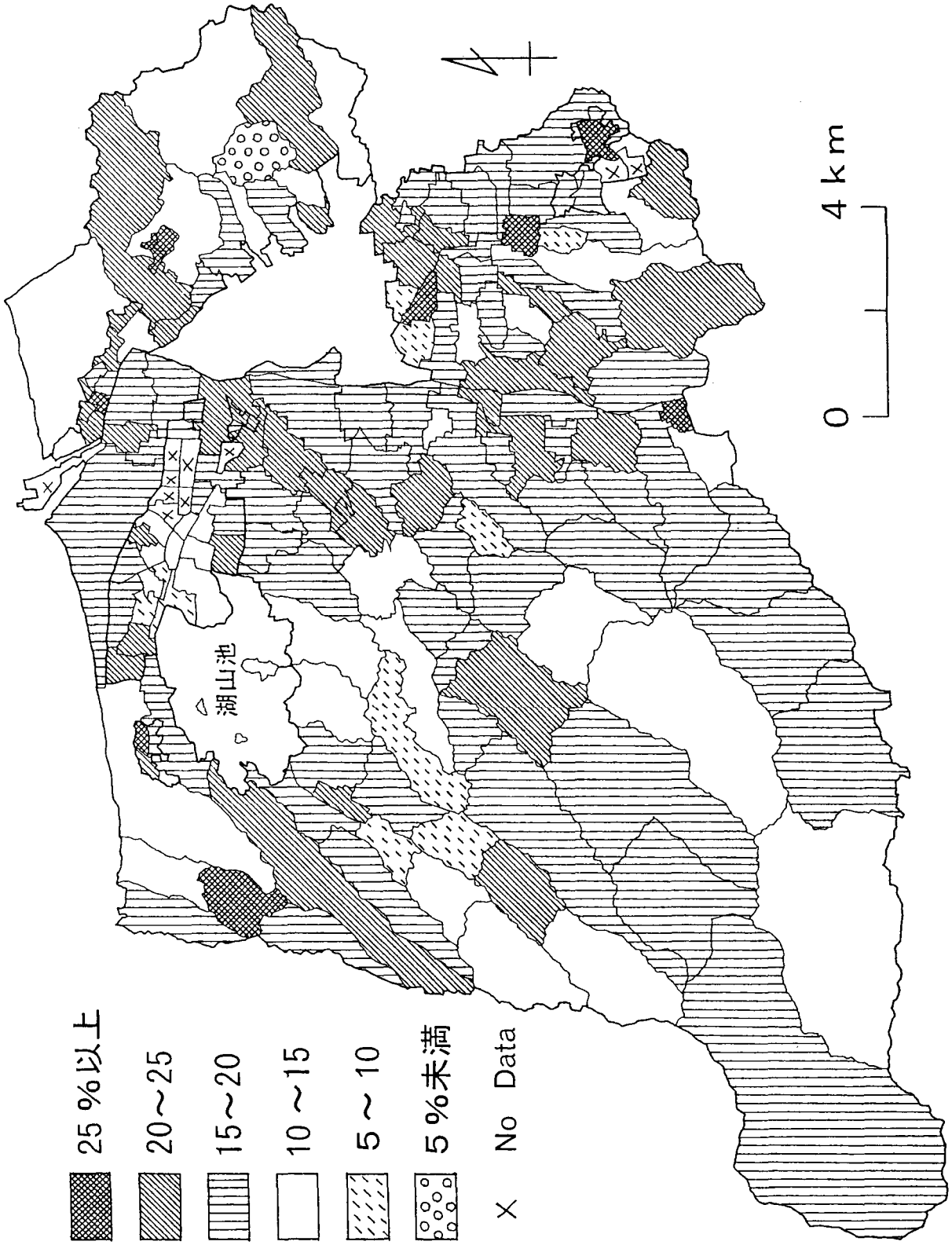
とはいえ、細かな地区別にみると、上述の状況とは異なり、人口数が減少している地区もあり、それらが鳥取市の都市・地域問題を一層複雑化させていると考えられる。次に、それらの事情の詳細を検討する。

第６－ａ図と第６－ｂ図（凡例は、第６－ａ図と共通）は、1995 年の０～ 14 歳の比率（最大＝ 34.2 ％、最小＝ 0、平均＝ 16.858、標準偏差＝ 5.282）の分布を描出したものである。５％未満や 10 ％未満の低い比率を示す地区は、各所に分布しているが、西町１丁目・本町１丁目・職人町・元魚町２丁目・川端４丁目・弥生町・末広温泉町などの旧来からの市街地の中心部、三山口・妙徳寺・長柄（ながら）の西部地区、湖山西１丁目・湖山南５丁目・湖山北２丁目、大覚寺・宮長の市街地の南郊に比較的まとまって分布している。

これらに 10 ～ 15 ％の地区を加えてみると、行徳（ぎょうとく）、今町（いままち）、吉方（よしかた）温泉、吉方、片原（かたはら）の各町丁などの旧来からの市街地の多くや、篠坂（しのざか）から有富（ありどみ）～高路（こうろ）～岩坪（いわつぼ）に至る有富川の谷筋、湖山地区、湖山池の南岸から長柄を経て瀬田蔵（せたくら）～洞谷（ほらだに）に至る湖山川・洞谷川の谷筋などで、低い比率がまとまって分布している。

次に、高比率をみせる地区に着目する。25 ％以上の値を示す地区は、北園、立川町１～３丁目、浜坂４丁目、新（しん）、的場、津ノ井ニュータウン（若葉台）、美萩野１丁目、内海中（うつみなか）などに散在するが、これらには、いわゆる新興住宅団地がいくつか含まれている。さらに、これらに 20 ～ 25 ％の地区を加えてみると、覚寺～浜坂の北郊、東郊の滝山、南郊の吉成～興南（こうなん）～南吉方～大杙（おおくい）～雲山～正蓮寺（しょうれんじ）、安長から徳吉～徳尾～嶋～宮谷に至る地域、源太（げんた）から国安（くにやす）～八坂（はつさか）～越路（こえじ）に至る南部地域にまとまった分布がみられる。

０～ 14 歳の比率は以上に述べたような複雑な分布を示しているが、あえて単純なパターンを想定すれば、中心部である旧来からの市街地が低く、その周囲の近郊で高くなる楕円状に、谷筋や方向別に高・低の連続的な分布がみられる扇型（セクター）状を組み合わせた分布パターンが伏在していると読むこともできる。



第6－a図　鳥取市内の0～14歳の比率（1995年）（1）

第６－ｂ図　鳥取市内の０～14歳の比率（1995年）（２）

また、第７－ａ図と第７－ｂ図（凡例は、第７－ａ図と共通）は、1995 年の 65 歳以上の比率（最大＝ 64.2 ％、最小＝ 0、平均＝ 19.678、標準偏差＝ 9.330）を描いたものである。30 ％以上の数値を示す地区は、元町・本町１丁目・東町２・３丁目・大榎町・立川町１丁目などの市街地の中心部、その東郊の小西谷・百谷、および御熊・洞谷・細見・有富・高路・中砂見・赤子田などの西部から南西部にかけての農村地域に分布する。

これらに 25 ～ 30 ％や 20 ～ 25 ％の地区を加えると、高い値は、市街地の中心部から東郊にかけての地域と、西部～南西部～南部にまとまっている分布パターンが一層明確化する。

また、10 ％未満や 10 ～ 15 ％の低い数値を示す地区は、おおむね、高い数値を示す２つの地帯に挟まれて分布していることが読みとれる。そこで、65 歳以上の比率の分布を単純にみると、市街地の中心部から離れるにつれて高～低～高とおおむね変化する楕円状的なパターンの伏在を読むことができよう。

なお、０～ 14 歳の比率と 65 歳以上の比率は、逆相関しており、相関係数は-0.59 である。また、1960 年～ 1995 年の人口増減比率との相関係数では、14 歳未満の人口比率が 0.25 であるのに対して、65 歳以上の人口比率は-0.48 であり、高齢者の比率が高い地区では、人口が長期的に減少した一般的傾向があることが統計的に言えるが、いずれの相関係数も際立って大きいわけではなく、細かく見ていくと当然、様々な亜類型を設定することができる。

３．２　1995 年の人口構造の予察

ここでは、1995 年に限定して町丁別に人口構造を検討する。1995 年の５歳ごとの年齢別人口（18 変数）を用いて標準距離を用いた Ward 法によるクラスター分析で町丁を８類型[4)]に分類した作業（分類図は省略）と、それらの類型の構成地区数を参考にして、事例になる町丁を選定して、それらの５歳ごとの人口ピラミッド（下から０～４歳、５～９歳、……、ただし、最上段は 85 歳以上の階級になる。）を作成・提示し、考察する。

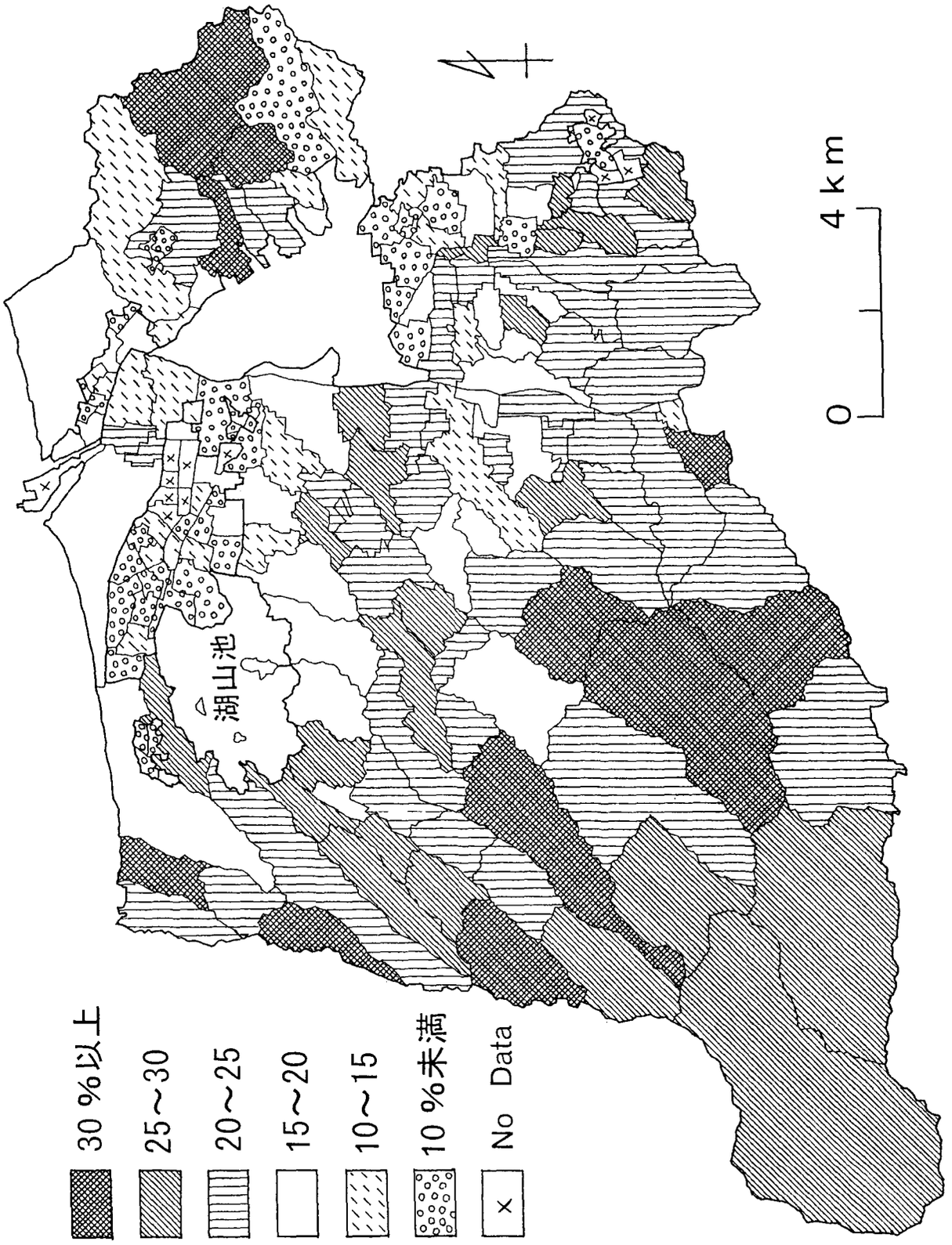
人口構造の型を比較するため、横軸方向の目盛りは人数ではなく、％表示にした（第８図）。事例としては、西町１丁目、川端４丁目、永楽温泉町、北園１丁目、桜谷、美萩野１丁目、細見、晩稲、美和、湖山町南５丁目の 10 町丁を選定した。また、北園１丁目と美萩野１丁目を除く８町丁については、1960 年から５年おきに 1995 年までの年次の人口や世帯数などをあわせて検討する（第２表）。

西町１丁目（1995 年の人口は 287 人）では、人口が 1960 年から 1995 年にかけてほぼ半減し、世帯数は６割台に低下し、１世帯当たりの人口は 4.3 人から 3.5 人になった。人口構成では、40 ～ 65 歳の部分が大ピークをみせ、10 ～ 20 歳の部分が小ピークになっている。10 歳未満や 20 ～ 40 歳の比率はかなり低い。高校、幼稚園、法律事務所、司法書士事務所、各種の商店が立地するほか、住宅としても古くから利用されている。

川端４丁目（1995 年の人口は 129 人）における世帯の減少率は、同期間で西町１丁目とほぼ同程度であるが、人口は３割に低下した。１世帯当たりの人口は、4.9 人から 2.2 人に激減した。人口構成では、男性は 60 歳代、女性は 55 ～ 75 歳の部分に大ピークがあり、それらより若い年齢層の比率は総じて低い。この地区は鹿野橋に近く、古い住宅や事業所・商店があるが、そのほとんどが昔ながらの職住同居で、２階が居住用になっており、短冊状の土地割も長年、変化していないと判断される。中林（1997）に掲載されている 1715（正徳５）年の「鳥取市街大切図」中の河端四丁目付近の屋敷割と現在のそれ（住宅地図）を比較してみると、このことは明らかである。地元相手の店舗が多く、鹿野街道を通過する交通量を除けば交通量は少なく、商店街の賑わいは乏しく、比較的静かである。

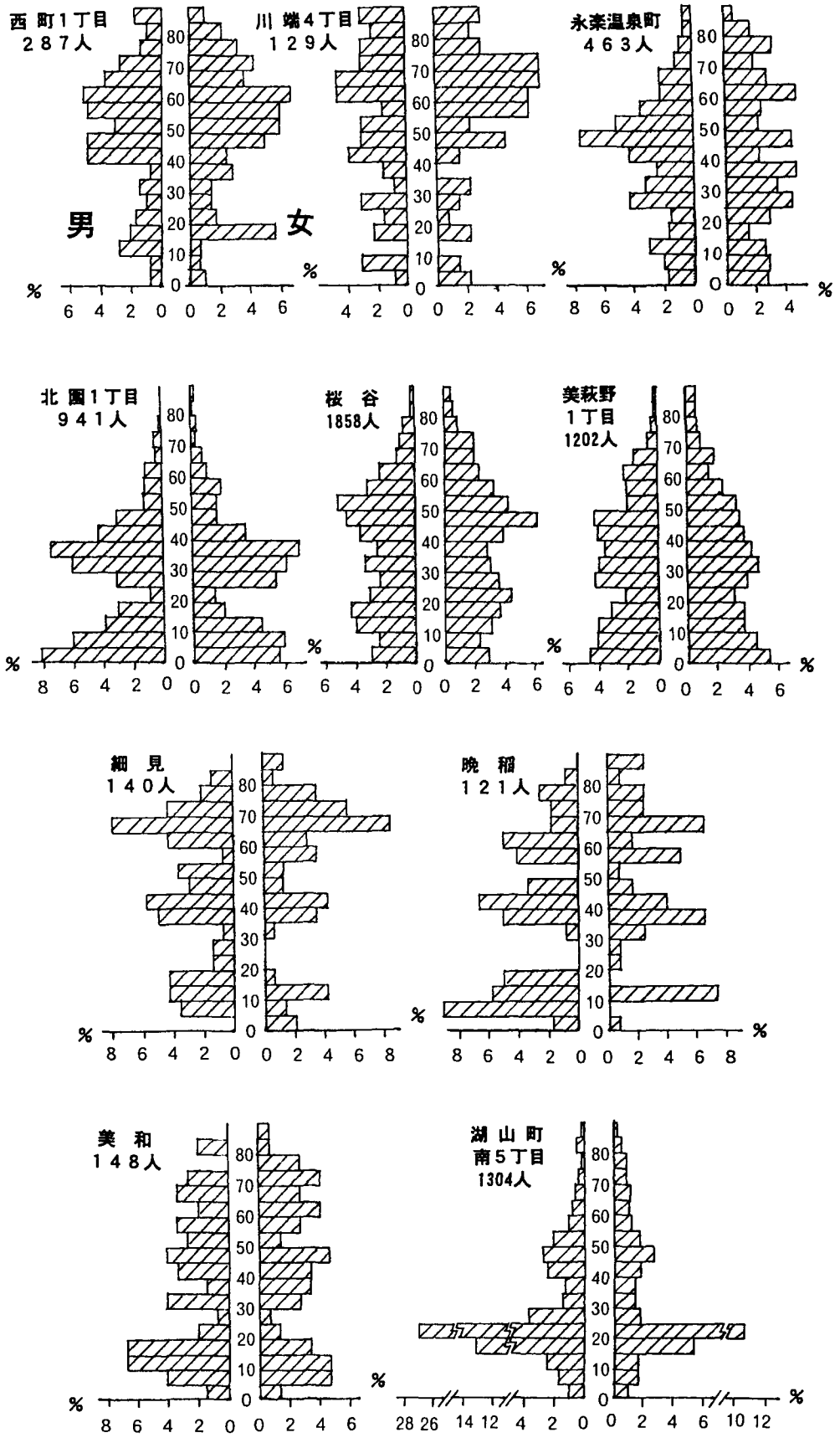
永楽温泉町（1995 年の人口は 463 人）では、人口は６割台に低下したが、世帯数は６割程度増加した。人口の推移をみると、1960 年から 1980 年までは約半減したが、それ以降はやや増加した。世帯数も 1980 年以降に急増している。ホテルや温泉旅館に加えて、飲食店も多い。また、１世帯当たりの人口は４割に低下し、1.9 人になった。人口ピラミッドをみると、男性の 45 ～ 54 歳の突出を除けば、男女間に大きな差異はないとも読める。しかし、それぞれの特徴に着目すると、男性では先述した 45 ～ 54 歳の大きな１つのピークがみられるのに対して、女性では明瞭なピークがみられずに幅広い年齢層に分散しているという、男女間での差異が顕著であるようにも読める。

北園１丁目は（1995 年の人口は 941 人）、北園２丁目とともに円護寺地区に造成された鳥取市の北郊の住宅団地であり、人口ピラミッドをみると、男女ともに 30 歳台と 10 歳未満の年齢層にピークがあるので、住民の平均年齢は比較的若く核家族世帯中心の特徴がみられる。北園２丁目を経由して坂道を上って北園１丁目の北園ニュータウン停留所までバスが運行されているが、その便数は非常に少なく、現在ではさほど問題にならないが、団地のライフサイクルや人口高齢化がすすんだ段階で、何らかの手だてが求められてくるのではないか。低い山ないし丘陵地



第７－ａ図　鳥取市内の65歳以上の比率（1995年）（１）

第７－ｂ図　鳥取市内の65歳以上の比率（1995年）（２）


西町1丁目
287人
川端4丁目
129人
永楽温泉町
463人
北園1丁目
941人
桜谷
1858人
美萩野
1丁目
1202人
細見
140人
晩稲
121人
美和
148人
湖山町
南5丁目
1304人
男
女
%

第8図　人口構造の事例

第２表　町丁別の人口、世帯、１世帯当たりの人口、およびそれらの時間的推移

年次	西町１丁目 人口		世帯		１世帯当たりの人口		川端４丁目 人口		世帯		１世帯当たりの人口	
1960年	559人	100	130	100	4.3人	100	436人	100	89	100	4.9人	100
1965年	537	96	118	91	4.6	107	543	125	47	165	3.7	76
1970年	512	92	113	87	4.5	105	230	53	69	78	3.3	67
1975年	433	77	103	79	4.2	98	195	44	63	71	3.1	63
1980年	406	73	105	81	3.9	91	164	38	52	58	3.2	65
1985年	368	66	96	74	3.8	88	143	33	52	58	2.8	57
1990年	323	58	88	68	3.7	86	134	31	52	58	2.6	53
1995年	287	51	81	62	3.5	81	129	30	58	65	2.2	45

年次	永楽温泉町 人口		世帯		１世帯当たりの人口		桜谷（桜谷団地を含む） 人口		世帯		１世帯当たりの人口	
1960年	689人	100	147	100	4.7人	100	143人	100	24	100	6.0人	100
1965年	614	89	171	116	3.6	77	140	98	23	96	6.1	102
1970年	515	75	155	105	3.3	70	145	101	28	117	5.2	87
1975年	434	63	151	103	2.9	62	690	483	181	754	3.8	63
1980年	326	47	129	88	2.5	53	1,442	1,008	382	1,592	3.8	63
1985年	449	65	218	148	2.1	45	1,599	1,118	443	1,846	3.6	60
1990年	483	70	231	157	2.1	45	1,802	1,260	524	2,183	3.4	57
1995年	463	67	238	162	1.9	40	1,858	1,299	573	2,388	3.2	53

年次	細見（口細見、奥細見を含む） 人口		世帯		１世帯当たりの人口		晩稲 人口		世帯		１世帯当たりの人口	
1960年	316人	100	53	100	6.0人	100	157人	100	25	100	6.3人	100
1965年	281	89	53	100	5.3	88	143	91	24	96	6.0	95
1970年	262	83	51	96	5.1	85	128	82	25	100	5.1	81
1975年	237	75	52	98	4.6	77	116	74	25	100	4.6	73
1980年	225	71	50	94	4.5	75	115	73	26	104	4.4	70
1985年	203	64	50	94	4.1	68	132	84	28	112	4.7	75
1990年	183	58	48	91	3.8	63	126	80	25	100	5.0	79
1995年	140	44	40	75	3.5	58	121	77	27	108	4.5	71

年次	湖山町南５丁目 人口		世帯		１世帯当たりの人口		美和 人口		世帯		１世帯当たりの人口	
1960年	133人	100	27	100	4.9人	100	177人	100	30	100	5.9人	100
1965年	186	140	38	141	4.9	100	170	96	32	107	5.3	90
1970年	246	185	118	437	2.1	43	153	86	29	97	5.3	90
1975年	521	392	275	1,019	1.9	39	142	80	31	103	4.6	78
1980年	849	638	496	1,837	1.7	35	149	84	31	103	4.8	81
1985年	679	511	344	1,274	2.0	41	154	87	30	100	5.1	86
1990年	1,150	865	702	2,600	1.6	33	150	85	29	97	5.2	88
1995年	1,304	980	890	3,296	1.5	31	148	84	28	93	5.3	90

鳥取市の各種資料を筆者が集計して作成.

を開削して住宅団地を造成したので、坂道がやや長く屈曲状になっていることが、冬季および高齢者にとっては、懸念材料になっていると考える。

桜谷（1995年の人口は1,858人）は、鳥取市の南郊の住宅地で、東は国府町に接し、中学校や幼稚園があるほか、住宅地の南には水田が広がっている。面影山の南・東麓には屋敷地が広い旧家もみられるが、新しい地割の1戸当たりの宅地面積は、多くの新興住宅地と同様にさほど広くはない。1960年以降の人口の推移をみると、宅地が造成された1970年代からの増加がとくに顕著で、1995年には当初の13倍の規模になっている。また、世帯数の増加率は、人口のそれ以上である。1世帯当たりの人口は、1960年の6.0人から1995年には3.2人になった。これをみても、核家族で居住する世帯の転入が急速にすすんだことがわかる。人口ピラミッドでは、45～55歳、10歳代にピークがみられる。

美萩野1丁目（1995年の人口は1,202人）は、1967年に都市計画地域に指定され、伏野・三津の山林、畑、水田、原野を切り開いて1972年9月から造成され、浜坂・高草・世紀・東今在家などの郊外地域とともに住宅団地が造

成された。空中写真や住宅地図から明らかなように、JR 山陰本線沿いの１丁目には県営住宅（集合住宅）もあるが、多くは敷地面積が（美萩野２・３丁目よりも）広い１戸建てである。また、スーパーマーケット、医院、理・美容店、電機店、食堂、銀行、タクシー営業所などが立地し、美萩野地区の中心的な機能を備えている。その後、美萩野２・３丁目が開発され、現在では４丁目が造成されてきた。人口ピラミッドは吊鐘型を呈しており、25 ～ 30 歳がやや少ないが、50 歳未満の５歳ごとの年齢層の比率はほぼ４％前後を示している。

細見（1995 年の人口は 140 人）では、人口・世帯数ともに減少し、1995 年の人口は 1960 年の４割台に、1995 年の世帯は 1960 年の 75 ％に低下した。1 世帯当たりの人口は、他地区と同様に大幅に低下した。人口ピラミッドの形状をみると、高齢者の比率の高さが顕著であり、男女ともに 65 ～ 70 歳、35 ～ 45 歳、10 ～ 15 歳を中心とした３つのピークがみられ、３世代居住が持続していることが明らかである。

千代川左岸の河口近くに位置する晩稲（おくて）（1995 年の人口は 121 人）では、人口は 1960 年以降わずかずつ減少する基調にあるが、世帯数は若干増加している。1960 年に 6.3 人であった１世帯当たりの人口は、1975 年までに 4.6 人にまで減少したが、その後は安定した推移をみせている。人口ピラミッドでは、男女間で形状がやや異なる部分があるが、大局的には、５～ 20 歳、35 ～ 45 歳、55 ～ 70 歳の辺りに高まりがみられ、３世代同居の様子が示されていると考えられる。

美和（1995 年の人口は 148 人）では、人口・世帯が 1960 年以降減少の基調にあるが、それらの減少の幅はあまり大きくない。また、１世帯当たりの人口も減少傾向にあるが、他地区と比較すれば、減少の比率はわずかである。人口ピラミッドの形状では、ピークは必ずしも明瞭ではないかも知れないが、５～ 20 歳、30 ～ 50 歳、55 ～ 75 歳の辺りに高まりがみられ、３世代同居になっていることがわかる。

美和集落内の家々は、固まって分布している。各家の屋敷地はさほど広くはなく、母屋の他に離れや作業小屋があって、建て込んでいる。昔ながらの蔵や門をもつ家が多く、当然、庭もある。29 軒あるが、世帯員が５人以上が 12 軒で、その多くは６、７人居る。世帯主（若主人）が農業に従事している家はほとんどなく、農業以外の様々な職業に従事している。この集落の家々では、子供が３人ぐらい居るのが通常で、また、後継ぎをする気持ちが強く、分家を近くに構えるのはあまりなく、昭和時代になってからも美和集落で２軒にすぎないという。

美和集落の耕地は約 27 町歩で、１戸平均の経営規模は１町歩弱であり、周囲の他の集落の場合よりは広く、コメや野菜が栽培されている。新しい動きでは、1996 年から８月７日に納涼祭を開始した。美和集落では、多くの農村集落にありがちな分家による世帯の増加がほとんどみられないが、３世代同居は安定した人口動向を維持し続けることにつながる可能性が大きいのではなかろうか。

湖山町南５丁目（1995 年の人口は 1,304 人）は、鳥取大学湖山キャンパスの西に位置しており、主に大学生が居住するアパート（いわゆる、ワンルーム「マンション」を含む）・下宿や、団地型で開発された一戸建ての住宅が多い。人口は飛躍的に増加したが、世帯数は人口の増加の速度をはるかに超える速度で、増加してきた。この結果、１世帯当たりの人口は 1960 年の 4.9 人から、1970 年には 2.1 人に減少し、その後もわずかずつ減少している。人口ピラミッドをみると、15 ～ 25 歳の年齢層の比率が格段に突出していることが最大の特徴であるが、40 ～ 55 歳と５～ 15 歳の部分にもわずかばかりの高まりを認めることができよう。類似の人口構造は、鳥取大学の近くの湖山地区のいくつかの町丁でもみられるはずである。

以上のように、ここでは、鳥取市の中心部やその近くでは西町１丁目、川端４丁目、永楽温泉町を取りあげ、人口や１世帯当たりの人口が長期的に減少し続け、高齢者人口の比率が高い構造を示すことを例証した。また、北園１丁目、桜谷、美萩野１丁目のような高度経済成長期以降に開発された住宅団地では、人口が急増し続けて核家族主体の人口構造がみられることが確認できた。町丁ごとの人口構造の形状やピーク人口の差異には、住宅団地が開発され始めた年代が反映されているものと解釈できる。さらに、細見、晩稲、美和は古くからの農村集落であり、人口は長期的に低減し続けているが、都市中心部のようには急激な人口減少はみられず、１世帯当たりの人口の低下も他地区ほどには顕著ではなく、３世代同居がかなり持続していることが予想できる。大学生の比率が高い湖山町南５丁目の例は、大学の存在という局地的な要因によるものである。これらの 10 町丁については、所詮、予察・標本的検討の域を出るものではないが、鳥取市内の人口構造の諸類型をある程度説明していると考える。

ただし、これらの人口構造やその時間的推移を含めた町丁の意味ある類型化を提示したり、人口以外の諸指標との関連を考察するには、別の方法論的枠組みが必要である。

4．まとめにかえて

本稿では、小地域統計を使用して鳥取市の人口分布やその時間的変化、ならびに人口構造を、断片的にではあるが（地）図化して提示した。その結果、各町丁のライフサイクルの相違の一端が明らかになった。人口指標は基本的資料にすぎないが、多種の属性との関連を検討することができるので、小地域から構成される都市全体をみるには、人口的側面の多様性や持続・非持続性を考慮することも求められる。

都市計画は、各市でほぼ毎年度何らかの形で見直している。これは時勢の変化に柔軟・臨機応変に対応できる点が評価されるが、別の見方をすれば、都市計画を現状に合わせて頻繁に変更することは、地域・都市計画の哲学・思想の欠如の証明である。仮に、長期的に一貫した都市計画が不明確であれば、過去のある期間の都市計画事業が現在・未来に活かされる保証は必ずしもなく、邪魔や無駄と判断された場合には建築構造物などが取り壊されることもある。日本に限らず、諸外国でも実施されてきた都市中心部の多くの再開発はこの例になるかも知れない。このような事情を考慮すると、計画理念の多少の変化はやむをえないかも知れないが、大幅な変化を伴う場合には、情報公開のうえ、英知を集め十分な時間をかけて議論することが必要であろう。

謝辞：分析に用いた統計資料は、鳥取市役所からご提供いただいた。記して、感謝の念を表明します。

注

1）筆者は、「空洞化」にしろ、ドーナツ化にしろ、現状では用語の内容が厳密に検討されていると認識していない。この報告では詳述しないが、「空洞化」の使用はとくに要注意と考えているので、あえて括弧をつけている。

2）単位地区の設定においては、別の作業との関連で 1960 年や 1995 年以外の年次も考慮に入れている関係で、以下に示した地区については、括弧内の地区や住宅団地（現在では無くなっている場合や、呼称が変更していることがある）などを含むように組み替えてあることに注意されたい。
行徳１丁目（旧行徳、行徳は）、行徳２丁目（旧行徳ろ）、行徳３丁目（旧行徳い）、西品治（旧元品治、八千代町、千代町、寿団地を含む）、田島（２カ所の合計）、滝山（上野開拓を含む）、旧卯垣（（新）卯垣、卯垣１～４丁目を含む）、宮長（大宮町を含む）、叶１丁目（叶茶屋、叶土居）、河内（安蔵を含む）、槇原（小原を含む）、細見（口細見・奥細見）、上原（報徳を含む）、里仁（世紀団地を含む）、布勢（山王団地を含む）、高住（高江団地を含む）、松原（高殿を含む）、伏野（中ノ茶屋、身障施設を含む）、三津（療養所、特別養護老人施設を含む）、賀露町（旧賀露町１、２、３、４、５、６、７、８、10 区の合計）、湖山町西１丁目（老人ホーム敬生寮、鳥取大学学生寮を含む）、湖山町北３丁目（市営住宅、県営住宅、公務員住宅（合同庁舎）を含む）、湖山町北５丁目（雇用促進住宅を含む）、徳吉（徳吉団地を含む）、旧浜坂（（新）浜坂、浜坂新田、浜坂夕日丘、浜坂東浜の合計）。

3）賀露町の住居表示は、その後変更された。

4）いくつかの手法を実施し、グループ化にともなう情報損失量の増加量の様子を考慮すると、この場合にはいずれも８類型に分けることが適切であり、また、Ward 法が最もシャープに各グループを峻別することがわかった。

参 考 文 献

市南文一（1991）：第１章　古くからの観光拠点「鳥取」. pp.29-41. 山田安彦・山崎謹哉編「歴史のふるい都市群・10 ―山陰・中国山地・南四国の都市―」、大明堂.

市南文一（1994）：人口現象からみた鳥取市と鳥取県東部地域. 鳥取大学教育学部研究報告（人文社会科学）、**45** 巻２号、pp.143-169.

小笠原節夫（1994）：第２章　人口. pp.18-49. 川上　税・桑島勝雄編著「新訂　人文地理学序論」、大明堂.

鳥取市企画部企画室 編（1982）：「昭和 55 年国勢調査結果の概要」.

中林　保（1997）：「因幡・伯耆の町と街道」、富士書店、p.290.

Blumenfeld, H. (1954) : The tidal wave of metropolitan expansion. *Jour. Amer. Inst. Planners*, **20**, pp.3-14.